

The effect of preventive oral care on postoperative infections after head and neck cancer surgery

権藤, 多栄

<https://doi.org/10.15017/4060025>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (看護学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : ©2020 Oto-Rhino-Laryngological Society of Japan Inc. Published by Elsevier B.V. All rights reserved.

氏名	権藤 多栄					
論文名	The effect of preventive oral care on postoperative infections after head and neck cancer surgery (頭頸部癌手術後の術後感染に対する予防的口腔ケアの効果)					
論文調査委員	主査	九州大学	教授	橋口	暢子	
	副査	九州大学	教授	諸隈	誠一	
	副査	九州大学	教授	谷口	初美	

論文審査の結果の要旨

本研究は、頭頸部癌対象者における術後肺炎および手術部位感染（SSI）の発生率を調査し、口腔ケアと術後感染の関係を明らかにすることを目的としたものである。

調査は、2016年から2018年に大学病院において頭頸部癌手術を受けた209名の対象者の診療録をもとに行われ、対象者の基本属性、口腔要因（残歯、歯垢付着率など）、手術要因（手術時間、出血量など）、栄養要因（アルブミン値、ヘモグロビン値など）の情報が収集された。術後肺炎およびSSIの発生率は、鼻・副鼻腔から喉頭にかけて手術を行った者に限局していたため、最終的にはそれら患者122名を分析対象者とし、口腔ケア支援との関連が検討された。術後肺炎とSSI発症とその他の関連要因に関しては、単変量分析後、多重ロジスティック回帰分析を行い、感染発生までの期間に関してはCox比例ハザードモデルを用い分析が行われた。

結果として、調査対象者の術後肺炎とSSIの発症の割合は20.5%と23.0%であった。術後肺炎の発症は、手術時間（ $P < 0.01$ ）、出血量（ $P = 0.004$ ）、気管切開術（ $P < 0.01$ ）、再建術（ $P < 0.01$ ）、術前のPlaque control record（PCR：歯頸部に付着したプラークの割合）値（ $P < 0.01$ ）と有意に関連していた。また、多重ロジスティック回帰分析により、術後肺炎の発生率は、術前口腔ケア介入後のPCR値が50%以上の対象者で有意に高いことが示された（OR = 10.174、95%CI 2.14-48.32、 $P = 0.004$ ）。気管切開術（ $P < 0.01$ ）、再建術（ $P = 0.044$ ）、術前アルブミン値の低下（ $P = 0.019$ ）、および術前ヘモグロビン値の低下（ $P < 0.01$ ）は、SSIの発症と有意に関連していたことが明らかとなった。

以上のことより、専門家チームによる口腔ケア教育介入の対象者では、術後肺炎の発生率は、術前のPCR高値対象者で高く、術前の口腔ケアへのコンプライアンスを高めることの重要性が示された。

本研究結果は、頭頸部癌術後に問題となる術後肺炎予防において、臨床実践に寄与する意義ある結果であると考えられる。予備調査委員会において、主査、副査から専門的観点より論文内容および関連した事項について種々の質問を行ったところ、いずれも適切な回答を得た。よって、本論文は調査委員の合議の結果、博士（看護学）の学位に値するものと認める。

主査 橋口暢子
副査 諸隈誠一
副査 谷口初美